

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

松山智一 現代美術家

Tomokazu Matsuyama / Contemporary Artist



CREATOR INTERVIEW No 166

松山智一 Tomokazu Matsuyama

1976年岐阜県出身。上智大学卒業後2002年渡米。現在はNYブルックリンにスタジオを構え、絵画を中心に、彫刻やインスタレーションを発表。また大規模なパブリックアートをかける手がけることでも知られる。

これまでに世界各都市のギャラリー、美術館、大学施設等にて展覧会を開催。また、ロサンゼルス・カウンティ美術館、サンフランシスコアジア美術館、クリスタル・ブリッジーズ・アメリカン・アート美術館、マイアミ・ペレス美術館、龍美術館、宝龍美術館等に作品が収蔵されている。

近年の主な展覧会に「Mythologiques」(ヴェネツィア/2024年)、「Pop Forever, Tom Wesselmann & ...」(レイ・ヴィトン財団/2024年)、「松山智一展:雪月花のとき」(弘前れんが倉庫美術館/2023年)「MATSUYAMA Tomokazu: Fictional Landscape」(上海宝龍美術館/2023年)がある。

主なパブリックアートには、2019年ニューヨークのパワリーミュージアムや、2020年明治神宮創建100周年に展示した彫刻作品、2020年JR新宿東口駅前広場のモニュメント《花尾》がある。

No

166

松山智一

現代美術家

TOMOKAZU MATSUYAMA / Contemporary Artist

自己や他者との多重的な対話が、かけがえのないアートになる。



クリエイターインタビュー

『多様なアイデンティティを通して、街に新たなストーリーを紡ぐ』

published_2025.04.16 / photo_yuka ikenoya / text_ikuko hyodo

ニューヨークを拠点に、グローバルに活躍する現代美術家の松山智一さん。幼少期をアメリカで過ごし、25歳で再渡米。現地の名門美術大学院のデザイン科を首席で卒業後、紆余曲折を経て本格的にアーティストを志したという異色な経歴をお持ちです。今や世界で注目される松山さんの、東京で初となる大規模個展「松山智一展 FIRST LAST」の開催は日本的に言えば“逆輸入”。グローバルな視点でリアルに現代社会を捉えた作品を生み出す松山さんは、いかにして特異なアーティストとなったのでしょうか。

「FIRST LAST」が意味するところ。

日本はいろいろなものを“翻訳”するのがとても上手な国ですよ。今回の展覧会のタイトルも、多義的な意味を含めてさまざまな形に翻訳可能な言葉にしたいと思いました。「FIRST LAST」は直訳すると「最初で最後」という意味になります。自分の故郷でもある日本でこの規模の展覧会を開くまでに20数年の時間がかかっているの、その時間に真摯に臨みたいという思いがひとつありました。



松山智一展 FIRST LAST

松山さんの東京で初となる大規模個展。四半世紀にわたって現代アートの本場ニューヨークで活躍し、いまや世界が注目する次世代アーティストのひとりとなった松山さんの、日本初公開となる大規模作品19点を含む、40点以上の作品を展示。展覧会タイトルでもある新シリーズ「First Last」もお披露目。麻布台ヒルズ ギャラリーにて、2025年3月8日（土）～5月11日（日）の会期で開催。

もうひとつ別の意味としては、僕のアイデンティティにまつわる部分。父が牧師でキリスト教の教えに囲まれて育った環境が大きく関わっています。幼少期に自分の意志で洗礼を受けたというよりも、叩き込まれたと言うほうが正しいかもしれません。「FIRST LAST」は、マタイの福音書の中にある、イエス・キリストが弟子たちに伝えた言葉「後の者が先になり、先の者が後になる」の意味も込めています。信仰においては、費やした時間の長さよりも、いかに献身的に信じるかが大切であり、後者に救いがもたらされるという、僕の好きな考え方を表す言葉です。

僕のニューヨークでの20数年間は、芸術家として売れるとか食えるとか以前に、見返りを求めたら破綻してしまうくらい壮絶で、ただ信じることしかできなかった。自分の信じる対象が宗教から芸術に変わっただけで、ひたむきに打ち込むことでしか答えが見つからない時間を過ごしてきました。美術作家になってからの20数年を今こうして振り返ってみたら、両親の献身的な姿勢と、僕も対象は違えど同じだったんだという気付きがあったんです。



松山智一 現代美術家

TOMOKAZU MATSUYAMA / Contemporary Artist

published_2025.04.16 / photo_yuka ikenoya / text_ikuko hyodo

どこに行ってもマイノリティだった。

結果論にはなりますが、今の自分を形成しているのは、ずっとマイノリティだったという記憶です。クリスチャンだった母に感化されて、父もクリスチャンになるのですが、生まれ育った飛騨高山は仏教や神事が深く根づいている地域。1年の行事の大部分が仏教や神事に関連しているので、クリスチャンの僕は、ほとんど何も参加できないし、周りからは「あの子はクリスチャンだから」という扱いを受けることが多くありました。さらに、あるとき突然、両親に「再来月からアメリカに行くぞ」と言われて。父がアメリカの大学で本格的に聖書学を学ぶために渡米したので、今度は“アメリカの中にいるアジア人”になりました。

80年代のアメリカは、ベトナム戦争を経てアジア人への人種差別意識が蔓延しているような時代です。家族全員が学生の立場だったので、駐在員みたいがいいところに住めるわけでもなく……ラテン系や黒人、ベトナム戦争のボートピープルなど、さまざまなコミュニティの価値基準が入り乱れていました。それが僕の原体験で、どこに行ってもその場に馴染もうとしていた。周りの様子を見て自分の立ち位置を決めるのは、まさしく今の多様性社会と同じ。僕は幼少期からずっとそれをやってきているといえます。

25歳でニューヨークに来てからはまったくお金がなかったし、周りも必死でサバイブしている人ばかりでした。ニューヨークで何かを成し遂げようとする人は、ナタリー・ポートマンがバレリーナを演じた『ブラック・スワン』で描かれている状況が当たり前の世界。結婚する前、妻がこの映画と一緒に観ようと言ったのですが「僕が日常でやっていることを、なぜお金払って観なければいけないんだ!？」と思ったくらい。あの映画で注目されるようになった「アルターエゴ」という言葉は、哲学的に他我の意味で使われることが多いのですが、自分を違う人に置き換えないと生きられないような環境で培われる、ある種の多重人格性こそが、マルチカルチャーであり、自分のアイデンティティに通じていると感じています。

『ブラック・スワン』

ダーレン・アロノフスキー監督による、2010年に制作されたサイコスリラー映画。ニューヨークのバレエ団に所属し、バレエにすべてを捧げるニナ（ナタリー・ポートマン）が、ライバルの出現により精神的に追い詰められ、自らの心の闇に飲み込まれていく。

「FIRST LAST」を開催するにあたって「どうして、最初で最後なんですか」と聞かれることが多くありますが、毎日生き残りをかけて生活しているニューヨーカーの葛藤が、僕にとってのリアル。毎回そういう覚悟をしているという想いがあります。

内側から出てくるものだけでは、世界に届かない。

アートが楽しいのは、アイデンティティを探ることができる場所にあると思っています。たぶんみなさんも普段気づいていないだけで、思っているよりもアイデンティティをたくさん持っているはず。僕の場合は、出身が飛騨高山で、渡米後80年代のアメリカ西海岸でスケートボードやスノーボードなど横乗り文化に出会います。学生時代はスノーボーダーになるものの挫折して、デザインの勉強をする。だけどデザインでは思うようにいかず、25歳で奮起してキャンバスと絵の具を買って絵を描き始めた。

ざっと振り返るだけでもいくつもアイデンティティがあるのですが、作品をつくるという行為はそれらを俯瞰して、どう整理していくかに尽きます。たとえば、安藤忠雄さんや坂本龍一さんなど海外で活躍している方は、日本人性と世界性と普遍性のような3つのチャンネルが共存していて、同じような経験をしているな、と作品を通して感じます。何となく内側から出てくるものだけでは、やっぱり世界には届かない。自分の持っている文化性や歴史性、同時代性などを年月をかけて作品に投影しているのです。

「FIRST LAST」の展示内容もまさにそうですが、僕のルーツでもあるキリスト教の世界観を、時にはルネサンスやフランス絵画などから引用して、アメリカで活動している自身の解釈を表現に取り入れることで、現代社会の多様性を描写しています。以前は、そうすることにためらいがありました。特にアメリカでは日本人が英語で作品を発表すると、「なぜ自身の文化背景を用いないのか？」と疑問を抱かれてしまう。それと同じように、キリスト教に関する表現は受け入れられないと思い、ずっと封印していました。僕のDNAに組み込まれているとも言えるキリスト教を自由に表現できるようにさせてくれたのは、いわば作品自身なんです。作品が僕のアルターエゴではなく、僕が作品のアルターエゴになっている。作品ありきの自分の存在を、非常に強く感じています。



松山智一 現代美術家

TOMOKAZU MATSUYAMA / Contemporary Artist

published_2025.04.16 / photo_yuka ikenoya / text_ikuko hyodo

露出が増えるほど、見てくれる層が減っていく矛盾。

ニューヨークに来て最初の頃は、アーティストとして活動の機会をまったく与えてもらえませんでした。そりゃあそうですね。アメリカで基盤をつくってきたとしても難しい場所なのに、外国人がいきなり戦えるはずがない。それでも作品を見てもらわないと何も始まらないので、勇気を振り絞って交渉して、街中の壁に絵を描かせてもらいました。ニューヨーカーは好き嫌いをはっきりと目の前で言ってくれる。反応がシンプルでわかりやすいので、街が僕を育ててくれたと言えます。

長い年月はかかりましたが、そこから徐々に露出が増えていき、「パワリー・ミューラル」の壁画も描かせてもらいました。ところが、美術館やいわゆるホワイトキューブの大きなギャラリーで展示できるようになるにつれて、自分の作品を見てくれる人の層が減ってきたのです。美術館でアートを鑑賞する行為は、富裕層に限定され、アメリカでは人口の2割程度とも言われています。街中で絵を描いて戦ってきたなかで居心地の悪さを感じながらも、ある程度キャリアを積んできた今の自分に、何ができるのかと向き合うきっかけにもなりました。



パワリー・ミューラル

1982年にキース・ヘリングが描いたことで一躍有名になった、ニューヨークのBowery StreetとHouston Streetが交わる角に位置する壁。2008年に壁画プロジェクトが再始動し、JRやバンクシーなど名だたるアーティストが作品を描いてきた。松山さんは2019年と2023年の二度、壁画を制作している。

美術館がもつ素晴らしい機能のひとつは、僕らが生きている時代を後世に美しい過去として残すことです。そう考えると、印象派の絵画は、あの当時のパリの空気感があったからこそ人々の心に響いた。ニューヨークで生まれたポップアートも同様です。大事なものは現在との対話の図り方。それなのになぜ、芸術家もギャラリーも美術館もそこに注力しないのだろうかと思うようになり、今を生きるコミュニティにメッセージを送りたいという思いから、パブリックアートの仕事を意識的に増やしていくこととなります。その結果が、2020年に JR 新宿東口駅前広場につくった《花尾》でした。



《花尾》

2020年7月、JR新宿駅東口の広場に出現した、松山さん監修のモニュメントとランドアートからなる、パブリックアート。「花を持っている人物」をモチーフにした、7mの彫刻作品「花尾」が設置され、足元には周辺のビルの看板などの色を落とし込んだ、カラフルなランドアートが広がる。「Metro-Bewilder」（メトロ・ビウilder）というテーマは、都会を意味する「Metro」、自然を意味する「Wild」、当惑を意味する「Bewilder」を組み合わせた造語。

パブリックアートに必要なのは、ストーリーとローカリティ。

東京はどの街もキャラクターが薄まりつつありますが、新宿駅周辺がまだまだ面白いのは、均一化されていないからだと思っています。世界一の乗降者数を誇る新宿駅には、ゴールデン街があり、LGBTQ のアイコンといえる2丁目があり、北野武さんの映画の影響でインバウンド客が足を運ぶ歌舞伎町がある。日本に住んでいる人は意外と気づいていないのですが、海外から訪れた人たちにとっては興味深い文化として捉えられている。新宿こそ行ってみたい街なのです。

《花尾》が立っている東口の雑居ビルに囲まれたエリアの景観も同様で、新宿の多種多様なカルチャーをいかに生かせるかという意味ですごく挑戦的なプロジェクトでした。むしろ、僕はそこに魅力を見出していた。パブリックアートが人々の興味を喚起し、回遊に繋げるという理想的なあり方ができている手応えがあります。

再開発の只中に置かれるパブリックアートですが、アーティストには自分が届けた作品とそのカルチャーを、責任を持って文化遺産にしていく義務があります。メンテナンスには当然資金が必要ですから、クライアントの理解を得るという努力も然り。昨今のパブリックアートの風潮として、メンテナンスよりもあたらしいものを、という傾向がありますが、《花尾》は新宿の街に愛されているのを実感しています。

パブリックアートは、ストーリーがあってこそ価値が生まれるものなので、ローカリティが不可欠。当然、アトリエでつくったものをポンと置いても、大抵はうまくいきません。個性が際立ち、「これは自分たちのものだ」と語りたくなるような、愛着を持てる存在にならなければいけないのです。



松山智一 現代美術家

TOMOKAZU MATSUYAMA / Contemporary Artist

published_2025.04.16 / photo_yuka ikenoya / text_ikuko hyodo

つくる工程の8割は、考えて、書くこと。

パブリックアートはメンテナンスや、その土地の将来的な価値に左右されるところもあるので、アーティストにとってリスクが高い挑戦。それでも、やっぱり興味はあります。最近だと、シカゴにあるユニークな歴史を持つ街の図書館を、巨大な壁画でラッピングするプロジェクトを手がけました。多くの人に愛着を持ってもらいながら、誰でも学べる場所という公共の機能を果たすのが狙いです。とはいえ、スマートな感じに見せるよりも、リアリティやダークサイドが多少見えたほうがアメリカらしくなる。「これが真実だよ」と思ってもらえるようなエッセンスを含ませています。



シカゴ公共図書館のラッピングアート
(Chicago_Public_Library_Steinbrecher_C
PAG)

API (アジアン・パシフィック・アイランダー) と呼ばれる極東、東南アジア、南アジア、太平洋諸島に起源を持つ人をはじめ、黒人やアジア人、白人などさまざまな人種の人物像を描き、地元の人たちが花言葉を交えて、コミュニティの中心の場である図書館を包み込むようなイメージで手がけた。

六本木を舞台に何かやるとしたら、外国人がいることをもっと積極的にストーリーに盛り込むと思います。今回日本に帰ってきて感動したのは、僕の展覧会の設営で外国語が飛びかっていることでした。日本のクロネコヤマトさんは、アートハンドラー業界でも世界一といわれています。それは今まで培ってきた知見と経験があるからこそですが、一歩間違えると「日本人じゃないとできない」という驕りにつながってしまう。けれども、その固定観念を取り払って、さまざまな国の人たちがプロのチームとして動いているのがいいな、と。街が彼らによって支えられている、という意味を込めて、“外国人”であることがひとつの個性としてポジティブに捉えられるようなストーリーの可能性を感じています。

アーティストは“好きなものをつくっている”というイメージが強いかもしれませんが。ですが僕の場合は、第三者に見せないということであればつくらなくてもいい。なぜなら、作品に対するリアクションが僕をアーティストとして存在させてくれていて、だからこそ対話は不可欠であり、僕自身の制作工程の8割は、考えることでもあるからです。

制作中は、基本的に紙に文字を書いてアウトプットしている時間が多いですね。ほかの人が見ても、何を書いているかわからないような単語や文章の殴り書きのようなものですが。ひとつの作品につき、40、50枚くらい書いて、新しい作品をつくる時は必ず見直します。1枚1枚がピクトグラムのような役割を担っているので、そのときの記憶を鮮明に思い出すことができる。フロッピーディスクを口の中に入れて、ロードするような感覚ですね（笑）。

「とらや」と「うまい棒」が同じ空間に並ぶ意味。

今回の展覧会では、最後に「Tribute + Collaboration」というプロジェクトの展示スペースも用意しています。ここで行った協業はどれも、ゴールや予算など決めずにスタートしました。なのでたとえば、A-POC ABLE ISSEY MIYAKEとはTシャツ1型つくる話からスタートしたのに、インスピレーションの倍返しやり取りを重ねた結果、なぜかコートができあがっていた（笑）。商業路線に一切乗っていないんです。見ればきっと、ただのコラボレーションではないことを感じてもらえるはずですよ。



Tribute + Collaboration

展覧会のサテライト企画として、国内のさまざまなクリエイターと協働した作品を展示・販売。分野は現代アートに限らず、ファッション、食、音楽、玩具など多岐にわたる。和菓子屋「とらや」とは、食べることのできるアート作品を。かと思えば、国民的な駄菓子「うまい棒（げんだいびじゅつ味）」が発売当初の価格の1万倍となる10万円で販売されたり。どれもアートの自由さ、遊び心を感じさせてくれる。

現代アートの価値を決めるのは、作品自体ではありません。「価値があるから高い」「価値があるから良い」と捉えられがちですが、実際には美術館に代表される権威が承認しているものを、僕らが受け入れているだけのこと。その観点で考えると、江戸時代の印刷物である浮世絵の役者絵がメトロポリタン美術館で展示されているのと同じように、日本の現代アイドルのポスターもまた、芸術的・歴史的な観点からストーリーさえつくることができれば、同等の価値が生まれる可能性がある。

僕の絵の中で、雑誌の切り抜きのようなコンシューマーカルチャー的なものと、歴史的な名画のモチーフを混在させているのにも、同様のメッセージを込めています。「Tribute + Collaboration」で「とらや」と「うまい棒」が同じ空間に並ぶというのは、ある意味現代の日常でもあり、現代社会を描写するための引用とも言えると思います。「FIRST LAST」に登場するさまざまな記号を見て鑑賞者それぞれに読み取ってほしいと思いますし、アートってここまで間口が広くていいんだと思ってもらいたいですね。

撮影場所：『松山智一展 FIRST LAST』（会場：麻布台ヒルズ ギャラリー 会期：2025年3月8日～5月11日）

トップ画像作品名：《Passage Immortalitas》2024

本文中段の画像作品名：《We The People》2025

本文中の画像作品名：《Wheels of Fortune》《Double Jeopardy!》《All is Well Blue》

本文中の画像作品名：《Immortality Morality》2021

取材を終えて

エネルギーで知識が豊富、頭の回転が早く、そしてどこか大きな愛のようなものを感じる松山さん。それは「DNAに組み込まれている」と表現するキリスト教に由来するものなのか、常にマイノリティだった環境からくるものなのか、それともニューヨークでアーティストとしてなかなか芽が出ず、戦っていたときに触れた優しさからくるものなのか.....。アイデンティティはたくさんある、と言っていたように、おそらくそれらすべてなのでしょう。その大きな愛は、ご本人に会えなくても、絵の前に立てばきっと感じることはできるはずです。

(text_ikuko hyodo)